

第2回福山市学校教育環境検討委員会

1 日 時 2014年(平成26年)2月18日(火) 10:00~12:00

2 委 員

◎委員長, ○副委員長

名 前	役職名	名 前	役職名
◎秋川陽一	福山市立大学教育学部教授	森美智代	福山市立大学教育学部准教授
○永井純子	福山平成大学福祉健康学部教授	村上勝士	福山市自治会連合会会長
小野明人	福山市民生・児童委員協議会会長	藤井春勝(欠)	福山市公民館長会会長
平田誠治	福山市PTA連合会会長	藤原理絵	福山市PTA連合会監査委員
西本紀子	福山市PTA連合会女性部会長	岡本康成(欠)	福山市子ども会育成協議会会長
荒木一夫	福山市公立小学校長会会長	飛田洋悟	福山市公立中学校長会会長
松本茂太郎(欠)	福山商工会議所副会頭	喜多村祐輔	福山青年会議所理事長
藤本和士	連合広島福山地域協議会事務局長		

3 概 要

(1) 教育次長挨拶

(2) 事務局報告・説明

Ⅰ 第1回検討委員会の概要及び補足説明

Ⅱ 福山市小中一貫教育推進懇話会の報告について

Ⅲ 各中学校区における学校間の位置関係について

Ⅳ 学校規模によるメリット・デメリット

(3) 審議事項

Ⅰ 教育効果を高めるための望ましい学校規模等の基本的な考え方について

Ⅱ 社会の変化に対応する教育環境の整備に向けた具体的な方策について

Ⅲ 児童生徒の健全育成のための教育環境の整備について

【意見】

《教育効果を高めるための望ましい学校規模等の基本的な考え方について》

- ・学校規模・学級規模について検討する上では、学校現場の先生の意見を聞くことが重要である。事務局から何らかの方法で意見を聞いてもらい、それをもとに検討委員会で議論していくことにしたい。
- ・学校規模が違えばそれに合った教育方法があり、学校規模が適正かどうかを考えたことはない。その状態で最大限の効果を考えてベストをつくすようにしている。
- ・特別支援学級も少人数学級と言えるが、交流学习を行うなど、個別の配慮を行いながら、学校の中でより効果のあがる取組を行っている。
- ・全校○人以下がしばらく続けば学校の存続を検討するなど、具体的な数字を出してはどうか。学

校はある程度の子どもの数があるべきだと思う。

- ・学校規模について、キーワードになっている『切磋琢磨』を良い部分だけみるのではなく、立ち止まって考える必要がある。そこには、競争原理が働いていて、生き残るために勝ち残る文化が切磋琢磨ということでもある。福山市の子どもは、自己肯定感が低く、ふるさとに愛着がないと言われているが、それは居場所が感じられないということではないか。逆に少人数は、目が行き届くというが、管理するということにもつながる。一人ひとりが居場所を感じて、活躍できるということが大事であり、規模の大小ではないのではないか。コミュニケーション力の育成という部分についても、問題処理能力の蓄積としてではなく、人間性・人間力の醸成という側面から、今一度捉え直す必要がある。
- ・小規模の単クラスの中学校で育ったため、高等学校に行く時、うまく適応できるかという心配はある。
- ・学校規模について、児童数の減少により、小規模化は避けられない。メリットも多いが、デメリットも多いため、適正規模に近づけることが必要である。

《社会の変化に対応する教育環境の整備について》

- ・電子黒板やPCの導入については、対費用効果がどうかということも考えていかなければならない。
- ・社会環境の変化に伴い、地域のことを考えるということも大事である。福山を出ると、福山のことを知らないという現実さらされる。小中一貫教育の中で学ぶ、ふるさと学習に期待している。
- ・タブレットや電子黒板について、手書きの教材の方が効果があることもあるため、安直に導入するばかりが正しいとは言えない。しかし近隣諸国では当たり前のもので導入されている状況を鑑みると、この先、福山市は何を誇りとして教育を発展させていくのか考える必要がある。
- ・社会の変化に対応する教育環境の整備について、教育には時間をかけなければならず、教師自身にゆとりが必要である。子どもに対する個別指導、個性に合った教育ができるよう、子どもが教師に声をかけられるように、教員がゆとりをもっていることが必要である。

《児童生徒の健全育成のための教育環境の整備について》

- ・学校は、子ども自らが自分の学校のことを考え、こうして欲しいということを発せられる環境であって欲しい。
- ・学校関係者評価委員会で校長とのつながりはあるが、その他の教員とつながりをもつため、地域と学校という問題で、多少方向性を出してもらいたい。
- ・児童生徒の健全育成のための環境整備について、快適が最適とは限らないということに賛同する。不便も逆に良いかもしれない。本当に子どもにとって最適な環境というのを考えていきたい。

《人的環境の整備について》

- ・教職員の人的環境も大きい。教員は、週5日制の中で、生徒指導、保護者対応、クラブ活動、教材研究などを行い、多忙を極めている。小中一貫教育を進める上では、後補充の先生が配置されていることが大きいため、人的環境を整えて欲しい。

- ・労働条件の改善が必要である。先生一人であれそのレベルアップが学校にもたらす効果は大きいので、先生の研修の場、機会を保障していただきたい。
- ・教員が不登校や問題行動の子どもたちにより丁寧な関わりができるよう、必要な環境として、人的措置が必要だと思う。

【まとめ】

- 児童生徒の健全育成のための環境整備について、快適が最適とは限らないため、教育的視点で子どもにとって最適な環境を考えるべきである。
- 小中一貫教育を進める上では、乗り入れ授業の後補充の先生を配置すること、教員の資質を高めるための研修の機会を保障することなど、人的環境を整える必要がある。

【確認事項】

- 検討委員会において、望ましい学校規模等の協議を進める上で、現場の教員の意見を踏まえることが、教育環境のあり方を定めていく上で大変重要であることから、何らかの方法で意見を聞くこととする。
- 地域と連携した小中一貫教育を進める上での学校教育環境を検討するため、ふるさと学習や地域をあげた教育活動など、他市の先進的事例を、事務局から情報提供してもらい、新しい発想を得て検討していくこととする。
- 次回会議からは、検討すべき事項の柱、論点を絞って協議していくこととする。